

2007年3月7日 文化交流研究会第5回研究発表

「ルネ・マグリットとシュルレアリスム ―« solution » をめぐって」

吹田映子

マグリットは1938年の講演「生命線」において、イマージュの新たな創作方法を打ち出した。それは、あるオブジェを一つの「問題」として設定し、そのオブジェに「結びつく物」を、「類縁性」の模索を通じて「意識の闇の中」から探し出し、その「物」を「光」の下に連れ出して元のオブジェとともに置く。そしてこのオブジェと「物」の組み合わせを、最初に提示された「問題」の「解答」とする、というものである。「闇」と「光」のあわいに立ち現れるイマージュ。ここには、その後の画家を導いてゆく創作態度の方向性が暗示されている。そのことを確かめるために、本発表では、講演の二つの原稿を比較する。

第一の原稿は38年7月、第二の原稿は10月付けであるが、注目すべきはタブロー「一致の光」に関する記述の変化だ。7月には、ろうそくの光と、それを受けて闇から浮かび上がったトルソーの、白くきらめくその光との「類縁性」という、描かれた情景の方法論的な由来だけを説明していた。しかし、10月の記述はそれに認識論的な説明を加え、「光」と「闇」が互いに作用し合うことで「見る」ことの方が生じる、ということを示しているのである。そして、この「見る」ことの方の具体的な提示であるかのように、7月以降新たに制作されたタブロー「彼岸」が言及され、一つの断定がなされている。太陽（「光」）と墓（「闇」）のあいだに広がる広大な空間を示すこのタブローは、有限な「生」という主題を扱っている、という断定である。こうして画家は、「彼岸」の空間において、「見る」ことの方と〈有限なものとして生きている〉場を重ね合わせることで、「何を見るか」という問いのひろがりの総体を示したのである。

38年に確かめられたこの視点は、後の43年に始まる印象派風の作品で、再度前面に出てくることになる。そこでの画家は、印象として実際に感受される、その都度移り変わる「光」のきらめきを描く。それは、「見えない光と闇」の存在を示唆する端的な方法であるからだ。「見えない光と闇」が、「見えるもの」としての花や人のきらめき、つまり「生」を喚起しているのである。

こうして、38年の創作方法の延長上に、マグリット自身の絵画の方向性が明らかになる。それは、〈有限性〉を背負いつつ生きる者として、あくまでその「限界」内に留まることであった。そうしてこそ、「未知」についての感情を、「見えないもの」と「見えるもの」を含む人間の総体を、把握することができる。この態度は、後年の傑作「光の帝国」へと続くだろう。そしてこの点においてこそ、画家は、ある意

味で「見えないもの」と「見えるもの」との境界を解消しようとしていたとも言えるブルトンのシュルレアリスムとは異なる方向を向いていたのであり、47年の〈除名〉の根本的な原因は、そこにあったと言えるのである。